

シベリア回顧録

千葉県 脇坂 保

鴨川町役場書記として昭和十四（一九三九）年四月から十六年六月まで勤務、昭和十六年六月現在の脇坂家へ入夫婚姻のため、十六年七月から田原村役場へ転勤する。

当時の役場吏員といったら村長、助役、収入役の三役と平吏員六人で戦時態勢下業務も繁忙を極めた時代であった。

昭和十七年に入り、あちこちと赤紙（召集令状）が来る様になり、私にも十一月初め、たしか日曜日だったと思う、親しかった同僚の鈴木保君（彼も後で召集となり戦死）が私の所へ赤紙を遠慮遠慮持ってきた。

私にも召集令がきたのだ。絶体絶命、逃れようにも逃れることの出来ない軍の命令である……。意を決して事の重大さを妻に話す。そうこうして

いる内にも入隊の十一月二十七日が迫ってくる。妻が集めた千人針も出来、日の丸の寄せ書きも届く。

出発の二十六日の朝、田原小学校校庭にて村長以下在郷軍人会、国防婦人会、学校長、児童の見送りを受けて故郷を出発。

軍の達しにより防諜上、軍服に派手に日の丸を肩にタスキ掛等、目立つ服装を禁じられ、国民服に奉公袋一つを持つての旅立ちであった……。

東京駅に着いたら方々から集った召集兵達が皆な日の丸を肩に掛けていた。私も早速日の丸を出して肩に掛ける。その晩は十條の君塚の叔母さんの所へやっかいになり、翌十七日、東部三部隊（旧近衛歩兵二連隊）に入隊する。

私達十七年兵は既教育兵、未教育兵の併せて百八十二人東部三部隊において十一日間身体検査、被服の支給、内務班の編成、基礎訓練、時局講演等毎日規律正しい生活が始まる。

十一月三十日家族との別れの面会日。私は家内

と末妹ぬい子、義理の兄村上傳治氏とが、お寿司やボタ餅を持って来てくれ、皆でご馳走を頂きながら別れを惜しんだ。

南方に行くか、大陸に行くかが話題の一つであった。

十二月七日いよいよ出発の日、防諜上、行動はすべて夜間行われた。東部三部隊を暗くなつてから徒歩で品川駅まで行軍、品川駅から列車で下関まで、下関から輸送船に乗り玄界灘を渡つて十二月九日釜山港へ上陸する。地元婦人会の接待で朝食、にぎり飯に熱い味噌汁を……飯盒にもらい、心温まる食事を終わり、飯ごうを洗いに行った時、指先が飯盒にパリッパリッと凍りつくのには驚いた。

釜山から貨車で十二月十一日国境上三峰経由、満州国に入り貨車の中が寒いので、皆で貨車が揺れ動くくらい身体と身体をこすりあった。

十二月十三日朝、目的の大肚子川に到着、駅から二時間ぐらい行軍。部隊に入る我々の部隊名は

当初満州第二六〇〇部隊奥村隊といい、昭和十六年の創立の独立中隊であった。(十九年一月九日以降、満州第二六〇〇部隊川名隊、十九年十月五日以降、満州第一四二一部隊)

早速各人の所属の編成があり、故郷を出る時、役場の先輩だった。川名正弥氏が「脇坂さん軍隊に入ったら本部に入りなさい」と言われましたが、幸い指揮班(本部)に編成され経理室勤務でした。本部に編入された同年兵は私を含め四人でした。

最初の二日間は内務整理等で過ごし、三日目ぐらいから初年兵教育が始まり毎日厳しい訓練が続きます、一日の訓練が終わるとそれぞれの内務班に戻りますが、小隊に配属された同年兵達は一日訓練が終わると、ホッとする暇もなく古兵達の世話から夜寝るまで内務班での教育(イジメ)に相当泣かされた様ですが、私達指揮班の古兵達は皆紳士で、小隊の様な軍隊特有の「イジメ」等は全然ありませんでした。

厳しい教育も終わり一期の検閲も済み、同年兵

揃って一等兵に進級した。満州に着いて間もなく、苦しい教育中に家内から子供ができたとの報告があり、戦友達一同喜んでくれた。仲の良かった石橋君などは俺が名付け親になってやると、二人の名前をとって保久にしたらなどと本当に喜んでくれた。検閲が終わってからは一週間に一度の演習日以外は経理室に出勤して勤務し、被服が違うだけで、現場で事務をとっていた時と全く同じ感じだった。

その年の暮れには一選抜の上等兵に進級。だんだん兵隊も板に付いて来る。

翌十八年九月に待望の初年兵が入って来る。二年兵になってからは身体も楽になり、上げ膳下げ膳で神様のような存在だった。

昭和十九年の補充兵が入ってきた時分から戦況にもわかにかに不利になった様な情報も入ってくる様になった。

昭和二十年七月五日部隊移駐のため、住み慣れた大肚子川を出発して七月十五日に北安省北安の

防衛司令部に到着、直ちに任務に就く。刻々と入って来る情報に隊員一同緊張の度増すばかり。

ついに七月も終わりごろ、ソ連機の空襲があり、我が方に高射砲のないのを悟ってか、ごく低空にて司令部の上空を旋回しては北の方へと戻る。

そうこうしているうちに私達の駐留している北安より百八キロ北の孫呉まで戦車を先頭にソ連軍が進攻してきたとの情報が入る。

最もかわいそうだった事は戦争には全く関係のない邦人開拓団等の婦女子が頭を剃って男に扮したとか、集団自決をしたとの情報が入って来る様な有様でした。

八月十五日正午、重大放送があるから全員廊下に整列する様にとの指令があり、全員待機していたところ、ラジオのスピーカーを通して流れてくる天皇陛下のお言葉にただ感泣するばかりであった。

すると誰となく、これは敵のデマ放送だとか、また敗戦を信じない一部の兵達が殺気立ち、一時

緊張した空気に包まれた。

敗戦を知った兵達の今まで緊張していた心の虚脱感からか、または一応軍律から解放されたという安堵感からか酒を飲んで暴れ回る騒ぎもあった。また分遣隊からは二百三人が脱走したとの話も聞く。

玉音放送を聞いた二日後の十七日、我が部隊から押野伍長、富岡上等兵の二人が川名隊長の命令で軍使に立つと言う事を聞き、関東軍及び邦人の生命は俺が救うのだと直ちに隊長室へ行き、私を軍使の一人として派遣させてくれる様頼み、その夕方、押野・富岡・脇崎の三人が軍使に立つ旨命令が下った。

私達三人は早速敷布一枚分の白旗一枚と四ツ切りの六枚を用意して、隊長室でたゞいまから軍使に立つ旨申告してから、別れの盃を交わして、夜半北安駅からガソリンカーに乗り「ノモール駅」に着く。

休む暇もなく早速、川の土手に大きな白旗をし

っかりと立てて、夜の明けるのを待ちました。翌十八日早朝、川向こうのかなたより「ごうごう」と凄じ地響きを立てて敵の戦車を先頭に戦車四両装甲車六両がこちらへ向かって突進して来るのが見えた。

我々の作戦としては急に白旗を持って飛び出して行って、もし撃たれてしまつてはおしまいなので、三人でしばらくの間適当な間隔をおいて腕だけを出して白旗を振りながら十分に我々の所在を向うに認識させ様子を見たが撃ってくる様子がないので、三人で交替交替に土手の上に立ち上がった。両手の白旗を振り続けた。向うも戦車を止め私らを見ているだけで、撃ってくる気配も無いので三人並んで白旗を持って河原に降りていった。

同時に戦車も向こう岸から河原に進んで来てソ連兵十人ぐらいに銃をつきつけられて取り囲まれた。初めて見るソ連兵。銃をつきつけられた時の恐ろしかった事。今考えてもぞっとする思いでした。言葉は全然通じないので我々の使命である北

安駐屯地歩兵第三六八部隊近藤大佐と、我が川名隊長の書面を敵側へ渡して会見場所までソ連軍を誘導する役目に見事成功したのである。

敵の戦車に同乗し南下、北安駅へあと三十キロぐらいの地点で待ち受けた近藤大佐、池端警務長官に出会い、私達三人が完全に任務を果たした。

その日の昼ごろ無事原隊へ戻り、隊長に無事任務を果たした旨申告する。

ソ連極東第二赤軍司令官と近藤大佐の会見において我が軍の降伏と武装解除の場所、日時等詳細にわたっての取り決めが行われる。

八月二十二日、ソ連軍により武装解除の日、小銃、帯剣、軍刀、軽機類等一個所に山積みされる。始め武装解除が終わったらずぐ各部隊へ帰れると聞いていたが言に相違して、反対にそのまま北安飛行場の格納庫へ収容されてしまい、この時点でソ連軍の捕虜の身となる。格納庫での約二十日間の生活、自分達の物は一つなく、ソ連側から支給される乾パンの外、貨車の積み込み作業に出た

とき敵の目をぬすんで多少の食糧を失敬して来ては戦友皆なで分け合って食べるのがせめてもの楽しみであった。

二日たち三日たつうちに我々はこのまま果たして内地へ帰れるか、それともソ連へ連れて行かれてしまうのだろうかと言う事が毎日の話題であり、一方では船に乗せて南方洋上で船ごと沈没させられてしまふとかと言う噂までも出てきた。

九月十三日、行く先もはっきり分らぬまま朝集合がかり、隊列を組んで格納庫を後にして行軍が始った。

北安の市街地を右に曲がれば帰れる。左へ向きを変えて孫呉街道を北へ進めば「シベリア」行きと、運命の別れ道であった。

一生懸命祈る願いもむなしく、隊列の先頭は左へ向きを変えて歩いているではないか。もうどう仕様もない事である。

来る日も来る日も苦しい行軍が続く……行軍中ソ連兵の歩哨に、歩きながら時計、万年筆等めぼ

しい物はなんでも掠奪される。

一日の行軍も終わり盆地に入れられて寝る。朝起きたら体が霜でまっ白だ。

行軍が始まって三日目ぐらいから疲労と空腹で体力が一段と低下して落伍者が始め、我が部隊の戦友二人が死んだと聞く。

行軍中空腹にたえかね、隊列から飛び出し道端の畑へキャベツをとりに行った兵隊がソ連の歩哨に銃殺された。

軍隊当時の整然たる規律は全くなく、ただ黙々と歩くのみ。一人として話しかけてくる者もない。ただ野営の時だけ皆で体を寄せ合って寝る。

九月二十二日、ソ満国境の黒河に着く。黒河で一週間ばかり使役をしながら船の便を待つ。九月二十九日、ソ連領ブラゴエシチェンスクへ上陸する。ここでまた一週間ばかり使役をしてから、十月七日ころ、イズベストコーワヤの収容所へ入れられた。

イズベストの収容所では我が部隊の戦友達と一

緒で、お互いに励ましあいながら毎日作業に出ては互いに助け合っていました。当時の作業は伐採が主で、一メートル以上もある大きな鋸を両方で引き合い、大木を切り倒し三十センチぐらいに玉切って薪にする作業と、たまに鉄道線路に沿っての側溝掘りであった。

食事は「ノルマ」制で一日のノルマに達した者には黒パン四五〇グラム、最低で一五〇グラムしかもらえず、体の弱い人、また仕事の出来ない人はなお身体が弱ってしまうので同じ戦友としてみておれず、班に支給されたパンを平等に割って食べる様な方法もとられた。

私は主食である黒パンが性に合わないのか、黒パンを食べると胸やけがして苦しいので、平等に分けた少しのパンしかないのを半分ぐらいしか食べず残りは他の人にやり、スープを飲んで我慢した。

スープと言ってもほとんど塩ニシン、大豆、モロコシが主で、たまたま小豆の入ったスープが出

たときのおいしかった事、いまだに忘れられない。それと五月一日のメーデーの日、真っ白な白米のご飯と紅白のゆで卵。

それとこれはまた一生忘れられない事……いや忘れてはならない事。それは毎日朝、小さじ一杯白砂糖が配給になるのですが、煙草を吸いたいために舐めたい砂糖も舐めないで一週間分ぐらい貯めて新聞紙を切って包み、作業に出た時にロシア人に投げてやると、向うからも紙に包んだマホルカ（煙草の葉を刻んだ物）を投げてよこす。それを受け取り大事に一週間ぐらいそれを吸っていた。

十二月初めころ、黒パンが性に合わないのだったんだん体がやせてきて栄養失調になり、その上、腹の足しにと雪を食べたせいが大腸炎になってしまい、入院という事になり、馬糞に乘せられて病院に向かう途中、櫓から外へ転がり落ちるといふ騒ぎもありました。

入院生活三カ月ぐらいでどうか体力も回復してきたので、今度はクリドールの作業隊に収容さ

れたのでとうとう部隊の戦友と別れ別れ、知っている人の一人もない作業隊であった。

ここでもまた伐採作業場で帰りには皆なでペーチカで燃やす薪を少しずつ持ち帰ったので燃やす物には不自由しなかったのはよかったが、この収容所では南京虫が多く、南京虫に食われて体が赤くはれ上がってしまうほどでした。

体は疲れきっているのだが夜もろくろく眠れないので、白壁の隙間や柱の割れ目等へ石灰を塗りつぶし、これで良いと思つて寝るとどこから出てくるのか、とても寝てなどいられないほどでした。考えた挙げ句、炊事場へ行つてメリケン粉のあき袋をもらつてきてその中に入り、中から口を閉めて、やつと寝られる様になった。

腕に技術を持っている人、例えば時計や写真や自動車の運転手、床屋等自分の職業を生かせる者は十分な待遇を受け、楽な生活をしていた様です。

なお、ロシア語のある程度話せる者は通訳として本当によい待遇で、食べる物はすべてロシア人

と一緒で、着ている物までが我々とは全然違った服装をしていました。

二十一年八月、休養日に久しぶりに身体検査と天幕張りの蒸し風呂に入り被服の交換になり、頭も刈ってさっぱりした気分になる。

九月初め、下痢がとまらず、しまいには血便が出る様になり、体もこの前の栄養失調の時の様とやせて何をする気力もなくなってしまう、再度入院という事になりました。

今度の病院は相当大きく、ソ連の女医さんや日本の軍医さんらも居て、ロシア人の看護婦も片言の日本語を話していました。

四月ごろまで入院生活を送り、ようやく体も元へ回復してきたので、また他の作業隊へ回されるのではないかと、そればかり心配していたところ、通訳の伊藤さんという人が来て、病院のすぐ近くにあるロシア人の「マダム」の官舎当番に行く様にと指示された。三日ぐらいしてから、その官舎に通うことになった。

当番と言っても大した用事もなく、一日の作業は大体掃除をしてからペーチカで燃やす薪を用意しておいて、夕方マダム達が作業から帰って来るまでの留守番役でした。

五人いたマダムの内の一人で「キセネ」と言う当時五十歳ぐらいのおばあさんがいて、私を特別面倒をみてくれて、一日の作業を終わって帰りには必ず白パンと油のガラついたスープを飯盒に入れて、持って来て食べさせてくれた……。後で通訳に聞いた話ですけど、そのキセネ・マダムの父親がシベリア出兵当時、日本の岡田軍医という人に非常に世話になったとかいう事で、日本人に対して親日感情をいだいていた様です。

二十二年八月ごろ、通訳の伊藤さんが来て「脇坂さん、今度帰還名簿に名前が載っていたから国へ帰れますよ」と言ってくれ、そばで聞いているキセネ・マダムも「ダモイ・オ・チン・ハラシヨ（帰れる、オオイニ、ヨロシ）」と言って喜んでくれた。

九月十日ごろ、クリドール駅からダモイ列車に
乗りナホトカ港に。

ナホトカで散髪をしたり風呂に入ったりして乗
船までの四、五日を過ごし船の入るのを待つ。

九月十六日、一人ずつ名前を呼ばれて乗船する
事になりました。船に乗り込む時、日本の看護婦
さんに「長い間ご苦労様でした」と言われて頭を
下げられた時、これで本当に日本に帰れるんだな
と思うと、とめどなく涙がこぼれ、握りこぶしで
ふき払った情景がありありと今でも眼に浮かびま
す。

九月十八日朝、舞鶴港に接岸、舞鶴に上陸後検
疫を受けたり、予防接種を受けたりして復員手続
きを済ませ、被服の支給や旅費の支給等があつて
家へも電報を打っておき、九月二十一日夕刻、鴨
川駅に着き、出迎えを受ける。

長かった軍隊生活も今日で完全に召集解除の身
となった訳である。

【執筆者の紹介】

住 所 千葉県鴨川市坂東

生年月日 大正九（一九二〇）年二月一日千葉県

安房郡鴨川町貝渚に出生

学 歴 昭和七（一九三二）年三月二十四日

鴨川尋常高等小学校卒業

昭和十四年三月二十九日 鴨川青年学

校卒業

職 歴 昭和十四年四月 鴨川町役場書記とし

て勤務

昭和十六年六月 田原村 脇坂家へ入

夫婚姻

昭和十六年七月 田村役場へ転勤

軍 歴 昭和十七年十一月 赤紙（召集令状）

昭和十七年十一月二十七日 東部三部

隊（旧近衛衛兵二連隊）に入隊

昭和十七年十二月七日 品川へ下関

十二月九日 釜山港上陸

十二月十一日 国境上三峰經由満州国

へ
十二月十三日 大肚子川に到着 満州
第二六〇〇部隊奥村隊
昭和十九年一月九日以後 満州第一二
六〇〇部隊川名隊
十月五日以後 満州第一四二一一部隊
昭和二十年七月五日 北安省北安の防
衛司令部到着
八月十五日 敗戦
八月十七日 ノモール鉄橋土手に白旗
を持ち、軍使として立つ
八月二十二日 ソ連軍に抑留される
九月十三日 シベリア行き行軍
九月二十二日 ソ満国境の黒河に着く
九月二十九日 ソ連領ブラゴエシチェ
ンスク上陸
十月七日 イズベストコーワヤの収容
所へ
十二月 栄養失調大腸炎になり入院

（三カ月）クリドールの作業大隊に収
容
昭和二十一年九月 栄養失調、下痢
再度入院（七カ月）
昭和二十二年四月 病院近くのソ連入
のマダムの官舎当番
昭和二十二年九月十日 クリドール駅
から「ダモイ」列車に乗りナホトカ港
へ
九月十六日 ナホトカ港から乗船（帰
還）
九月十八日 舞鶴港に接岸上陸
九月二十一日 鴨川駅に到着（軍隊生
活召集解除）
昭和二十二年帰宅後、農業のかたわら
漁業会計士、山師、養鶏業に従事
（千葉県 伊藤 千次）